

# 学位論文審査結果の要旨

所 属	三重大学大学院医学系研究科 甲 生命医科学専攻 病態修復医学講座 肝胆膵・移植外科学分野	氏 名	出崎 良輔
審 査 委 員	主 査 楠 正 人 副 査 竹 井 謙 之 副 査 吉 田 利 通		
<p>(学位論文審査結果の要旨)</p> <p>A New Surgical Technique of Pancreaticoduodenectomy with Splenic Artery Resection for Ductal Adenocarcinoma of the Pancreatic Head and/or Body Invading Splenic Artery: Impact of the Balance between Surgical Radicality and QOL to Avoid Total Pancreatectomy</p> <p>脾動静脈浸潤を伴う膵頭体部癌に対する新術式：脾動静脈合併膵頭側亜全摘術 (PD-SAR) -癌の根治性と術後膵内外分泌機能維持についての検討-</p> <p>【主論文審査結果の要旨】</p> <p>出崎らは論文において下記の内容を述べている。</p> <p>脾動脈浸潤を伴う膵頭体部癌においては膵全摘術が一般的であるが、膵全摘はインスリン依存性糖尿病や外分泌不全を来し QOL の低下を引き起こす。このような脾動脈浸潤を伴う膵頭体部癌に対し、癌の根治性と術後膵内外分泌機能維持を考慮し膵全摘を回避する脾動静脈合併膵頭側亜全摘術 (PD-SAR) という新しい術式を考案した。本術式は脾動静脈合併・門脈合併の膵頭側亜全摘術で、残膵の血流は短胃動脈・左胃大網動脈・後大網動脈となり、左胃動脈浸潤例では胃全摘・脾摘を行い、残膵の血流は後大網動脈のみとなる。本術式の意義と有用性を、予後と術後膵内外分泌機能から検討がなされた。</p> <p>2008年1月から2013年12月までに膵頭側切除を施行した膵癌症例84例を対象とし、PD-SAR群(n=18)と膵頭十二指腸切除術(PD)群(n=66)に分け手術成績と予後を比較した。また術後1か月、6か月の残膵容積と、膵内外分泌機能評価を内分泌関連因子としてインスリン使用率と使用量、空腹時血糖、HbA1c、外分泌関連因子として血清アミラーゼ、便回数、栄養関連因子としてアルブミン、コレステロール、体重減少率を術前、術後1, 3, 6, 12か月に測定した。さらに詳細な膵内分泌機能の評価するためにPD-SAR群5例、PD群13例に術後グルカゴン負荷試験を行い、△Cペプチドを比較した。</p> <p>術後1か月、6か月後の造影CTでは全症例で残膵の血流は良好に保たれていた。PD-SAR群はPD群に比べ有意に治療前の腫瘍径が大きく、UICC-T4症例が</p>			

多いものの、術後合併症発生率に差はなく、予後に差を認めなかった(3年生存率: PD 23.7% vs. PD-SAR 23.1%,  $p=0.538$ )。術後1か月目のインスリン使用量はPD-SAR群が有意に多かったが、それ以降は有意差を認めなかった。両群共に退院後の低血糖発作を認める症例はなく、術後残膵内外分泌機能はほとんど差を認めなかった。またグルカゴン負荷試験では△Cペプチドも両群間で有意差を認めなかった。

以上のように本論文は、脾動脈に浸潤を伴った膵頭体部癌に対する脾動静脈合併膵頭側亜全摘術(PD-SAR)の意義と有用性を膵頭十二指腸切除術と比較し明らかにした論文であり、学術上極めて有益であり、学位論文として価値あるものと認めた。

BioMed Research International Volume 2014, Article ID 219038, 14 pages

Published online: June 12, 2014 DOI: 10.1155/2014/219038

Ryosuke Desaki, Shugo Mizuno, Akihiro Tanemura, Masashi Kishiwada, Yasuhiro Murata, Yoshinori Azumi, Naohisa Kuriyama, Masanobu Usui, Hiroyuki Sakurai, Masami Tabata, and Shuji Isaji